

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第 卷四十四第

行發日一月二年二十和昭

## 論叢

新宮涼庭の經濟思想

經濟學博士

本庄榮治郎

相續税の高さ

法學博士

神戸正雄

固定資本の性質

文學博士

高田保馬

## 時論

税制整理案を論ず

經濟學博士

汐見三郎

## 研究

ルーテル經濟觀の基礎

經濟學士

澤崎堅造

投資を越ゆる貯蓄の過剩

經濟學士

飯田藤次

獨逸兼營主義銀行における交互計算業務

經濟學士

田杉競

獨逸財政學と租稅轉嫁論

經濟學士

島恭彦

## 說苑

英吉利の對蘇輸出信用保證について

經濟學博士

小島昌太郎

ナチスに於ける共同體の概念

經濟學士

中川與之助

晝間移動人口論

經濟學士

青盛和雄

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

## 獨逸兼營主義銀行における交互計算業務

田 杉 競

### 一 序 言

兼營銀行主義とは、銀行、殊に商業銀行が短期商業金融と同時に、長期工業金融をも併せ營むことをいひ、その典型は「正則銀行業務と共に、有價證券發行業務及び手数料業務を併せ行ふところの大或は中株式銀行」たる獨逸信用銀行に之を見ることが得る。この兼營銀行をして兼營銀行たらしむる最も主要なる要素は有價證券發行業務であつて、<sup>1)</sup> 少くとも獨逸信用銀行に關する限りこの事は疑ひない。而して此の活動こそ獨逸工業の十九世紀後半における急速なる發展を可能ならしめたものである。

然し乍ら之と平行して營む預金銀行業務——正則銀行業務が有價證券發行業務の影響をうけざるを得ないことは自明である。歴史的には、専ら有價證券の發行とその賣買の業務のみを行ふ證券銀行が一八五〇年頃より盛に興り、それらが一八七〇年頃より預金業務を擴張して、茲に信用銀行と呼ばれるものとなつたのであるが、<sup>2)</sup> 獨逸信用銀行に於いてはその正則銀行業務に英國におけるそれと異なる特徴を見出すのである。茲に考察せんとするのは正則銀行業務の中かゝる特徴の一たる交互計算業務である。

先づ有價證券發行業務と交互計算業務とを取上げ、各の業務の大要を述べたる後に、兩業務間に如何なる內的

1) Schulze-Gaevernitz, G. v., Die deutsche Kreditbank, 1922, S. 23.  
 2) 楠見一正、島本融共著、獨逸金融組織論、283頁、Weber, Ad., Depositenbanken und Spekulationsbanken, 3. Aufl., 1922, S. 269.  
 3) Stille, O., Die Banken, ihre Arten und ihre Beziehungen zur Gesellschaftsordnung, 1924. S. 16-21.

外的な關聯があるかを考察するであらう。之に次いで獨逸における交互計算業務の著しい發展の事實に徴してその原因を討ねることとする。かゝる順序を逐うて交互計算業務が兼營銀行において如何に與信業務の一中心を形づくつてゐるかを明かにしたいのである。

## 二 有價證券發行業務と交互計算業務の概要

有價證券發行業務 *Emissionsgeschäft* は銀行業務としては特殊の性質を有するものであり、その故に *Irreguläre Geschäft* に屬してゐる。資本市場より長期信用（主として設備資金）を調達するものであるが、調達された信用は工業會社の株式又は社債の形をとつて現はれる。然し乍ら單に増資又は社債發行の場合のみに限らずして、新會社の設立、個人企業の株式會社への組織變更に際しても、更に會社の整理・合同に關與しても亦發行業務を行ふことが多<sup>1)</sup>い。

最初この業務は證券銀行に於て營まれたが、その際には銀行は自己資本を以て新企業を設立し、その株式を保有し、且かゝる株式の賣買によつて投機的利益を得ることを目的としてゐた<sup>2)</sup>。即ち専ら新會社の株式の値上りを待つて之を賣放つことにより、發起利得を得たのである。此の活動によつて證券銀行が獨逸工業の勃興過程に演じた役割は極めて大きい。然るにやがて預金銀行業務を兼營するに及び、短期信用をも融通し、又有價證券發行業務も益々發展せしむるに至つた。

有價證券發行業務において銀行は工業企業の證券を市場に賣出すのであるが、獨逸においては、工業企業の計

- 1) Jeidels, O., Das Verhältnis der deutschen Grossbanken zur Industrie, 1905, S. 42, 50.
- 2) Stüllich, O., Die Banken, usw., S. 20, Pinner, F., „Industrie und Banken,“ Art. im Handwörterbuch des Bankwesens.

算において賣出を仲介するに止るのではなくして、多くは工業企業より證券を買取り、之を自己の計算において市場に賣出す。證券買取と市場賣出との間には多少とも時間の距りあるを常とし、買取りの際、若くはその以前に、既に資金を工業企業に融通し置き、その資金の回收、即ち證券の市場への賣出は銀行が適當と認むる時期を選んで銀行の計算において之を行ふ。この意味において證券發行業務は單なる仲介業務に非ずして、證券買取り證券賣出までの期間、中間的な信用 *Nischenkredit* を許與する與信業務をなすのである。<sup>3)</sup> 若し市場における證券の賣行思はしからざる時は、證券を背負ひ込まざるを得ない。即ち資金の一部は未回收のまゝとなる。かくて此の業務は大なる發起利得を得る可能性ある反面、茲に大なる危険を包藏するのである。

抑も工業企業が長期資金を調達するに二つの方法がある。設備に要する豫定資金の全部又は大部分を最初より株式・社債によつて調達し、之を一先づ預金として置き乍ら、必要なだけその中より引出す方法が一である。又必要な時に少額宛借入れ、借入金額が大となつた時始めて之を整理して株式・社債となす方法が他の一法である。後の方法は邪道なりと一概に斷することは不可能である。<sup>4)</sup> 蓋し工業企業は期間としては中期の、又金額としては一時に巨額ならざる資金をも必要とするからである。かゝる場合資金借入方法として用ひられるものが手形引受信用と交互計算信用である。<sup>5)</sup>

交互計算信用 *Kontokorrentkredit* と云ふは交互計算業務の一面として現はれ、所謂當座貸越之に當る。<sup>6)</sup> 獨逸信用銀行に於ける交互計算業務は銀行によつてその内容に稍差異があるが、大體我國の當座業務と大差なきやうである。交互計算契約を締結するとき、銀行はその顧客の日々の支拂及び受取を茲に於て取扱ひ、又振替及び小切

3) 楠見、島本共著、前掲書、283頁、Pinner, a. a. O.

4) *Jeidels, a. a. O., S. 46.*

5) *a. a. O., S. 32 ff., 37.*

6) 銀行間の交互計算業務も同様 *Kontokorrentgeschäft* と呼ばれるから、茲ではこれらを含め、當座勘定といふ語を避け、交互計算業務といふ語を用ひる。

手の利用の便を與へる。即ち顧客は銀行の取引網の中に編入され、その中に於てすべての業務上及び私的の支拂取引を簡便迅速に行ふことを得るのである<sup>7)</sup>。しかもかゝる取引關係は永續的となるのが常である。此の故に銀行は顧客に對し自行とのみの取引を要求するとき、顧客の金融状態を知悉することを得るのである<sup>8)</sup>。この點が交互計算業務の一特徴である。次に銀行は契約せる範圍内において顧客に一定期間(期間は切替延長し得る)交互計算信用を與へる。交互計算信用にあつては一定限度内で必要な額だけ借入れ、又不要となれる分だけ隨時返却することを得、從つて借入額を最小限となし、利拂を減じ得るのである<sup>9)</sup>。信用が支拂業務と關聯して與へられ、且つその信用が大なる適應能力(彈力性)を有するといふ點が交互計算業務の他の一特徴である。支拂業務と關聯せる信用といふ點よりいへば、交互計算信用は元來短期資金に利用さるべきものである。即ち交互計算勘定の借方不足の際一時この信用をうけることが原則と考へられる。然し乍ら隨時借出し隨時返還し得るといふ事は、短期のみならず稍長期若くは中期の信用においても甚だ便利なる點であつて、此の故に交互計算信用が可成り長期資金として用ひられることゝなるのである。

### 三 兩業務の關係

工業企業が必要とする資金は通常短期のもの(經營資金)と長期のもの(設備資金)とに分たれる。然し乍ら長期的性質をもち乍ら比較的早く回收の期待せられる設備資金がある。例へば試験的設備、又は速かに償却の期待される特許權の買收の如き場合に必要なる資金の如き之である。又設備の擴張も事業の性質上、一舉に飛躍的に之を

7) Martin, E., „Kontokorrentverkehr“, Art. im Handwörterbuch des Bankwesens.  
8) a. a. O.  
9) a. a. O.

行ふよりも徐々にするのが適當なるものがある。例へば精巧なる技術を要する工業に屢々見る如き場合である<sup>1)</sup>。

以上の如き場合には振替・小切手・手形の如き短期資金によつて調達することも、亦株式・社債の如き全く長期の資金によつて金額を一時に調達することも適當ではない。茲に二者の中間の性質をもつ手形引受信用と交互計算信用とが最も有効に利用せられる餘地がある。勿論交互計算勘定及びその信用は日常の支拂に利用され、その限りに於いて短期資金であるが、同時に交互計算信用の形において、短期のみならず中期の資金融通方法となる。殊にこの信用が適應能力を有するが故に一層多く利用されるのである<sup>2)</sup>。かくて交互計算業務はそれ自身、工業に對する獨特の資金融通方法となるのであるが、更に兼營銀行主義の特色たる有價證券發行業務との關係において大なる意義をもつ。この點を稍詳細に考察したいと思ふ。

第一に交互計算信用は有價證券發行への先驅的信用である。之はいはゞ兩業務の外的・形式的關聯である。元來資金を借入るゝ際銀行としては、資金の使途を充分調査し、その後も嚴重な監視をすることは最も必要である。然し乍ら工業企業に於ては最初經營資金として借入れたるものを一部設備資金に振向けることは全く有り得ることである。かゝる場合も強ち銀行に對して詐術を用ひたとは限らず、事情の變化又は他の資金の遣繰によつて資金用途を變更することは屢々當然のこと々見なければならぬ。交互計算信用においても本來、又は最初の意圖においては短期資金として借入れたものが、一部設備資金として利用されることがあるであらう。又最初より稍長期又は中期資金として此の信用が利用されることは曩に述べた通りである。

一般的にいへば短期たるべき交互計算信用がかくの如く設備資金として利用されることは止むを得ないとして

1) Jeidels, a. a. O., S. 33-34, 46.

2) Martin, a. a. O.

も、それが巨額に達すれば、銀行はその資金保護のため、就中預金を中心とする資金の流動性の考慮のため、かかる信用を整理して株式・社債の形に變へなければならぬ。<sup>3)</sup>蓋しこの形においては銀行は之を繼續的に保有するに非る限りは工業企業の危険から免れるからである。發行業務は證券引受の時より賣出までの間の、所謂中間的信用を與へるものであることは既述の如くであるが、上述せる場合は、銀行は證券の引受の際に始めてかゝる信用を與へるのではなくして、多くは既にそれまで交互計算信用の形において與へられて居り、引受の時より所謂中間的信用となるに過ぎないのである。此の意味において交互計算信用は有價證券發行業務の先驅的信用形態に外ならない。但し交互計算信用を常に經過的信用形態と見、又發行業務の先驅として常に交互計算業務があると考へるのは正しくないであらう。<sup>4)</sup>

第二に交互計算業務は有價證券發行業務の安全性を増す。之は兩業務の內的・實質的關聯といひ得よう。交互計算業務においては銀行は顧客の業務的及び私的支拂取引を一手に扱ふを常とし、且その關係は概ね永續的である。謂はゞ顧客の出納係となつて絶えず顧客の金融状態を知ることを得る。更に金融状態と關聯して一般營業状態に通することは明かである。一般的にいふならば、かゝる永續的取引關係によつて銀行と顧客との間には友好關係が生じ、顧客のすべての金融的取引について短期長期を問はず、この銀行が當らんとするに至るであらう。銀行の種々なる活動の中で發行業務は特に危険大なるものであり、銀行は之が危険を防ぐため、或は工業企業に重役を派遣し、或は株式參與によつて企業の營業政策に關與するが、更にこの交互計算業務によつて絶えず金融状態を監視することを得るのである。而して交互計算業務が企業の營業状態を知悉せしめ兩者の友好關係を密接

3) Jeidels, a. a. O., S. 47, 127, Weber, a. a. O., S. 246.

4) Jeidels, a. a. O., S. 42, 47.

にすることより、單に發行業務のみならず、銀行の工業に對するすべての金融活動に當ることとなる、即ち交互計算業務が銀行と工業との總ての關係の聯絡點であるといふ事實は特にヤイデルスの強調するところである。<sup>5)</sup>

第三に交互計算業務は有價證券の消化を助ける一手段となる。この點亦前の關係と同様、有價證券發行業務の安全性を増す。それは銀行に交互計算勘定を開くと共に、顧客は銀行の取引網の中に編入されるが、銀行は引受けたる有價證券を市場へ賣出すに際して此の一團の取引網を利用するのによる。<sup>6)</sup>即ちこの顧客群を説いて證券を買はしめるのである。勿論銀行が證券を消化せしめるにはかゝる方法のみでは不充份であり、平常より有價證券賣買業務を盛に行へることが寧ろ最も有效なる手段となつてゐる。而してかゝる消化方法あるが故に、獨逸信用銀行は英國の證券發行業者に比し低廉なる引受手数料を以てこの業務を行ひ得るのである。<sup>7)</sup>

第四に銀行全體の収益性の點から交互計算業務は大なる意義をもつてゐる。有價證券發行業務が資本市場の状況によつて著しく變動のある業務であることは周知のことであつて、不景氣にはこの業務より得られる収益は激減する。この際一方に交互計算業務を中心とする正則銀行業務を行ふことによつて収益の變動を緩和することを得るのである。<sup>8)</sup>更に交互計算業務は預金業務と平行して發展したものであるが、かゝる短期の外來資本が銀行の基礎の大なる部分を占めてゐるといふ事情は、銀行の營業態度一般を決定し、發行業務の如きも過度に投機的に奔るのを抑制するであらう。<sup>9)</sup>この意味から間接的乍ら収益の安定に貢獻すると考へられる。

#### 四 交互計算業務の發展とその原因

5) a. a. O., S. 33, 63, 121.

6) Weber, a. a. O., S. 247, Pinner, F., „Industrie und Banken“, Art. im Handwörterbuch des Bankwesens.

7) Weber, a. a. O., S. 358.

8) Weber, a. a. O., S. 315, Jeidels, a. a. O., S. 140.

9) Weber, a. a. O., 357.



續つて交互計算業務の獨逸信用銀行における數字上の地位を見るに、交互計算信用は總投資額中の三五—四〇%といふ大なる部分を占めてゐた<sup>1)</sup>。しかも世界戦後は益々此の割合は増大し、最近においては約五〇%に上るに至つた<sup>2)</sup>。かくの如き交互計算業務、殊にその信用の發展は、大體上述せるところから見れば何等不思議なことではない。即ち一はそれ自身伸縮性ある信用形態であることに原因し、又一には獨逸信用銀行の重要業務たる有價證券發行業務との間に密接なる關聯があることによる。

前段までの考察によつてかゝる交互計算業務の長所と特徴とは大體明かにしたと思ふ。然し更に進んで、この業務の發展を説明するには相並んで中期・長期の信用として利用せられる手形引受信用との比較において、何故この交互計算信用がより多く利用せられてゐるかの問題を考へねばならぬ。この點を考察するために、手形引受信用にも交互計算信用の長所に代るべきものありや否やを見たいと思ふ。

手形引受信用の利率は交互計算信用のそれに比して低い。即ちアルドフ・ウェーバーによれば、銀行引受手形の割引歩合はライヒスバンクの公定割引歩合よりも相當低く、之に對して交互計算信用の利率は公定歩合よりも原則として一%方高率であり、且最低五%と定められてゐるといふ(一九二二)。この外兩信用とも年々%乃至一%の手數料を要する<sup>3)</sup>。この事情よりすれば顧客は引受信用をうけるのを喜ぶべきが當然であつて、又銀行間の競争は引受信用についても顧客の意を迎へんとする筈である。然るに手形引受信用が比較的發展せざるは如何なる理由によるのであらうか。

先づ之が説明としては、収益の多からざる點より銀行として引受信用を喜ばず、むしろ交互計算信用を發展せ

1) Jeidels, a. a. O., S. 28/29.  
2) 楠見、島本共著、前掲書、328頁。  
3) Weber, a. a. O., S. 185-186.

しめんとすることは明かであらう<sup>4)</sup>。然し、手形の流通が少く、割引市場が英國の如くに發達してゐないことに更に大なる原因が存するであらう。工業の側からこの事情を説明することは困難と思はれる。殊に當時の獨逸工業の特色、即ち商工業の著しき發展といふ點から殆ど何等の推論を得ることが出来ない。

茲に注意すべきは、獨逸においては手形引受信用が英國の如くに専ら流通信用に用ひられるに非ずして、生産信用にも用ひられてゐることであるが、又貿易金融(Trade Finance)にも多く利用され、又投資資金としても利用される部分が少くないやうである。従つて生産信用に利用される引受手形は決して多くないのである。<sup>5)</sup>

戦後における交互計算信用の發展は特に著しいものがある。即ち交互計算信用は總投資中の五〇%に達して來た。これ戦後、獨逸資本市場が崩壊して有價證券の消化力殆どなく、このため工業は銀行信用による外なく、銀行は又この貸付を有價證券に變形することが出来なくなつたのに因る<sup>6)</sup>。長期の外資を直接利用し得るのは大企業に限られる。その他の外資は概ね短期資金として銀行に輸入されてゐるが故に、銀行の運用資金とはなつてゐるものゝ、實は多く交互計算信用として貸出され、それが株式・社債に代る長期信用として利用されてゐる限り、資金の流動性が著しく悪化されてゐるのである。

尤も大企業にあつてはインフラチオン後、金融力を増大し銀行より獨立してゐるものがある。即ち或はコンツェルン銀行を有し、或はコンツェルン内において相互に資金の融通をなし、或は銀行の手を通ぜずして外債を募集する等の方法がとられる。又株式・社債によつて最初に巨額の資金を得、之を預金として保有し乍ら、徐々に利用するといふ方法も大企業においては屢々見られるやうになつたといふ。<sup>7)</sup>

4) a. a. O., S. 186.

5) Weber, a. a. O., S. 190-195, Jeidels, a. a. O., S. 37-38.

6) Hagemann, Das Verhältnis der deutschen Grossbanken zur Industrie, 1931, S. 57, 66, Martin, a. a. O., Pinner, a. a. O.

7) Hagemann, a. a. O., S. 174-182.

## 五 結 言

獨逸信用銀行の最大特徴とされる有價證券發行業務が獨逸工業の發展を促進したことは周知のことである。既に獨逸においてかゝる兼營銀行主義の褪色が認められるに拘らず、英國において今日に至るまで一部に兼營主義の輸入が唱導されるのは理由のない事ではない。然し乍ら有價證券發行業務は獨立に行はれる取引に非ず、それのみが工業資金融通方法であるのではない。正則銀行業務の一部たる交互計算業務を茲に問題とした所以である。

交互計算業務は顧客の日常の支拂取引を引受けるものであり、その延長として簡便な信用授與方法ともなる。しかもその信用が隨時貸出し、隨時返還し得るといふ點、即ち適應能力あるといふところにその大なる特徴がある。かゝる特色の故に短期のみならず、中期、長期の資金として工業企業に利用されるのである。

又かゝる交互計算信用は、長期巨額となれば、やがて整理されて株式・社債に變形されることが多い。しかも交互計算業務は工業企業との間に永續的な信任關係を醸成するのみならず、有價證券の發行を容易ならしめるといふ内面的關聯もあるのである。

かくして交互計算業務なるものはそれ自身工業に對する便利適切なる資金融通方法であり、同時に發行業務に深き關係をもつ。事實獨逸において交互計算業務の大いに發展したのもかゝる事情に基くものと考えられる。戦後は發行業務は極度の不振にあるが、既に深く根を下した銀行と工業との關係は一朝にして破壊されるものではない。變態的な状態ではあるが、戦後はこの交互計算業務が工業融資方法として益々その意義を増したのである。要するに獨逸信用銀行に例をとる限り、兼營主義銀行において有價證券發行業務は最も大なるものであるけれども、之と唇齒輔車の關係にある交互計算業務のもつ意義は充分に認識されねばならない。

1) S. E. トーマス著、産業金融論(金原賢之助、門脇良教譯)、164—199頁參照。